

主 題：大患難の中での救い2**聖書箇所：ヨハネの黙示録 7章9-17節**

前回、私たちは7章1節から四人の御使いたちのことは見ました。彼らがしばらくの間、神のさばきがこの地上に及ぶのを留めている間に、神によって選ばれた14万4千人のユダヤ人のクリスチャンたちが、迫害を恐れることなく救いのメッセージを語り続けていく、そのことを学んだのです。神によって特別に選ばれた14万4千人、彼らは大患難と言われる大変な患難時代の後半の3年半において守られるということがみことばによって教えられていました。

続けて、7章9節からこの大患難時代に起こる様々な出来事を見ていきます。

☆大患難時代における出来事 9-17節**A. 天における礼拝 9-12節**

9節から12節を見ると、先ず、天における礼拝の様子が記されています。9節「その後、私は見た。…」、この表現はこれまで何度もこのヨハネの黙示録の中で見て来ました。ここでヨハネはまた新しい幻を見たということです。7章1節から8節に記されていたことを彼は幻で見ますが、今度はまた違う新しい幻を見て、彼はそれを9節から記しているのです。

1. 集められた群衆 9節

彼が新たに見た幻は、大変な数の人々、群衆が集められるという幻です。「…見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。」、大勢の群衆が主の前に立つのです。主の前に彼らが集められている、その様子がこの9節に記されているのです。「あらゆる国民、部族、民族、」と記されている以上、すべての人がそこに含まれていることは確実です。異邦人もユダヤ人も。そして、ここに記されている人たちはこれから何度も出て来ますが、救いに与っている人たち、クリスチャンたちです。なぜなら、この9節に彼らのことが説明されているからです。二つのこと「白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、」と書かれています。簡単にその説明をします。

1) **白い衣を着** : 「白い衣」は神の賜物である「永遠の義」を象徴しています。罪赦された者たちはその罪の衣を脱ぎ捨てた聖い者です。ですから、「白い衣」と言ったとき、それは「神の永遠の義」、つまり、救いをいただいたということ象徴するのです。もう一つは、「勝利の象徴」です。このことは黙示録6:11ですで見ました。ローマの将軍は戦勝を祝うために、白い衣をまといました。患難時代のクリスチャンたちは信仰ゆえに殺されていきます。大変多くの数のクリスチャンたちが殉教します。でも、彼らは敗北者ではなく勝利者です。なぜなら、勝利者であるイエス・キリストを信じ、罪に対しても永遠の滅びに対しても勝利したからです。彼らは死んでも生きる者としての新しい人生を歩み始めた者たちです。また、この苦難も困難に対しても彼らは究極的に勝利するのです。勝利者であるゆえに、彼らはこの白い衣が着せられていると言います。

2) **しゅろの枝を手に持ち** : この表現を見て皆さんが思い出すのは、多分、イエス・キリストがエルサレムに入城されたときの光景ではありませんか？人々は手にしゅろの枝を持っていました。つまり、これは「お祝い、喜び」を表わしているのです。この群衆はあることを喜んでいいるのです。彼らには大変な喜びがあり、お祝をする理由があるのです。結論を言うならそれは「救い」です。彼らは救われたことを喜び、救われたことを祝っているのです。だから、9節に記されている数えきれないほどの多くの人々、この人たちは空中再臨の後、この地上に残された人々の中で救いに与った者たちです。しかも、その数はかなりの数だとヨハネは記しています。

この後、そのことが繰り返されて教えられています。つまり、患難時代にも神は多くの人々をお救いになるということです。このようにして全世界から救われた者たちが集まって来るということは、全世界に福音が伝えられているからです。ちょうど、イエスはマタイの福音書24:14で「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」と約束されました。ある人たちはこれは「空中携拳、空中再臨」のことだ、だから、空中再臨が起こる前に福音が全世界に宣べ伝えられて、そして、空中再臨が起こるとそのように解釈しますが、マタイの福音書24章、25章に書かれている「終わりの時代」とは、空中携拳の前のことではなく、イエスが地上に帰って来られる地上再臨の前のことです。ですから、空中再臨が起こったときには、もしかすると、まだ世界のどこかでこの福音に触れていない人たちがいる可能性は大いにあります。ただ、地上再臨の前には、イエス

がマタイの福音書24章で言われたように、すべての人たちがこのすばらしい福音を聞いており、その結果、世界中から、「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから」救われた者たちがこの御座のもとに集められるのです。

神の約束は成就するのです。福音が全世界に及ぶ、必ず、及ぶのです。どのようにして福音が及んでいくのか？いろいろな方法が考えられます。

◎福音宣教：この福音宣教について

・神は、救われた者たちを用いて福音を伝えさせる

まず、患難時代に救われた人たちの証を通して間違いなく広がっていきます。今と同じです。今も救いに与った者たちは、このすばらしい救い主を、このすばらしい救いを伝えようとしてことばをもって救いを伝えていきます。患難時代も同じことが起こります。

・神は、特別に選ばれた14万4千人のユダヤ人クリスチャンたちを用いて福音を伝えさせる

イスラエルをお用いになるのです。神は再びイスラエルをあわれまれてイスラエルの人たちが救いに与って、彼らが中心となって福音宣教がなされていきます。

・神は、イスラエルを用いて福音を伝えさせる

イザヤ42：6に「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」と書かれています。49：6にも「主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」と書かれています。救世主が救いのみわざを為され、そして、イスラエルの人々がこのように国々の光として用いられるその様子が記されています。そのために神はイスラエルを選んだ訳です。旧約の時代においても、神はイスラエルを選ばれて、イスラエルを通してイスラエルの神が真の神であり人類の希望であることを示して来られた。ですから、様々なときに主が働いている様子を見て、イスラエルの神こそが真の神だと、そのように告白する者たちが起こされました。確かに、光として彼らは用いられたのです。でも残念ながら、イスラエルは罪に陥ってその働きを為すこともなく、彼らは神に逆らっていったのです。しかし、この患難時代になると、神は再びイスラエルをあわれみイスラエルが光として異邦人たちの大きな証になります。その人たちを使って神は確かにすばらしい救いを成されるのです。

今までのところをまとめましょう。救いのメッセージが届いていて、そして、全世界に救われる人が起こされて、その人たちが神の前に集められている様子を見て来たのです。そこにはユダヤ人だけでなく異邦人である私たちもいます。

◎まさに、アブラハムへの約束の成就

こうして神はアブラハムに与えた契約をちゃんと成就させるのです。アブラハムの契約、神はアブラハムを通して地上のすべての民族が祝福されると約束されました。最初に、創世記12：3でそのように約束が与えられ「12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」、15：5「そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」と続きます。そして、22：17では「わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。」と約束されたのです。

つまり、神はアブラハムを通して、この祝福はユダヤ人だけでなくすべての人々に及ぶということです。すべての人々にこの祝福を与えるということです。そして、今私たちはこの黙示録を通して、その神が約束されたことの成就を見ているのです。恵みの時代、教会の時代と言われている今のこの時代だけでなく、空中擧がが終わった後の患難時代においても、神のさばきがこの地上に下されるその患難時代においても、神は人々を救われるのです。そして、福音が全世界に広がって、全世界からこの救われるたましいが起こされていくというのです。そのような計画を神はお持ちであり、そして、神はこのようなことを成し遂げられることによって、旧約の時代に約束されたことを必ず成就させる神であることを再び私たちに明らかにしてください。私たちの神はこのような神です。言ったことを必ず守られるお方です。ですから、この患難時代に救われた人々、イスラエルを用いて神はすばらしい証をなさるのです。

◎14万4千人はどのような方法でその働きを為すのか？

もう一つ、14万4千人のユダヤ人クリスチャンたちを神はお用いになります。彼らはどのようにその働きを為すのだろうかと考えました。全世界に福音が及んでいくとなると、当然、言語の問題が出て来ます。紀元前70年にイスラエルは国を失いました。ユダヤ人たちは世界中に分散していきました。

今でこそ、1948年にイスラエル共和国が誕生して、イスラエルには多くのユダヤ人たちが戻っていますが、まだまだ多くのユダヤ人が世界に散っています。日本にも1000人には足りませんがユダヤ人たちがいます。間違いないことは、彼らはその住んでいる所の言語を話します。イスラエルに戻った人たちも、住んでいた所の言語を話しています。きっとたくさんの言語でしょう。彼らが証し人になって自分たちの母国語をもってイエス・キリストの福音を語るということは当然起こり得ることです。

皆さん、そのように考えた時に、神の為さることに絶対は無駄がないでしょう？なぜ、クリスチャンたちが世界に押し出されていったのか？それは迫害です。なぜ、イスラエル民族が世界に離散していったのか？迫害です。でも、その背後には絶対者なる神のご計画があるのです。そう考えたときに、神の偉大さに圧倒されませんか？何となく、偶然起こっているかのように思うこともすべて神の御手のうちであって、神はそれをお用いになってすべてのことを支配しておられると、そのことを明らかにしてください。いずれにしろ、このような人たちによって福音宣教が世界中になされて、そして、世界中から救われた者たちが集まっている様子、それが9節に記されていることです。

2. 群衆による礼拝 10節

続けて、この人たちが何をしているのか？見ていきましょう。9節の後半から「**御座と小羊との前に立っていた。**」10節「**彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」**」と、集められた人たちがいるところは地上ではなくて天です。このクリスチャンたちは殉教したクリスチャンたちです。患難時代に確かに多くの人たちが救われますが、先に話したように、大変な数のクリスチャンたちがいのちを落とします。この患難時代は大変なときであって、信仰を持つのはいのちがけです。そして、多くの信仰者がそれゆえにいのちを落としていくのです。その人たちが今何をしているのか？ヨハネが教えています。彼らは神の御座の前に、そして、小羊イエス・キリストの前に立っているというのです。そして、そこに立って彼らは、この神に対して礼拝をささげているのです。10節「**彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」**」

確かに、私たちは黙示録6：9で患難時代に殉教したクリスチャンたちが、祭壇の下にいて祈っている様子を見て来ました。「**小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。**」と、彼らは主なる神が約束されたさばきをいつ下すのですか、とそのように祈っている様子が書かれていました。7章では、彼らは祭壇の下ではなくて神の前にはいて書かれています。彼らは一番すばらしいことをしているのです、神の前にはいて、神を礼拝しているのです。「**彼らは、大声で叫んで**」いるとあります。この「叫ぶ」という動詞は「叫び続けている」という様子を表わします。現在形です。ですから、彼らは大声で神を礼拝し続けているのです。継続して…。間違いなく、永遠に継続して神に賛美、礼拝をささげ続けているのです。

だれに対する礼拝なのか？「**御座にある私たちの神にあり、小羊にある。**」と書かれています。この礼拝は御座に着座されている父なる神に対するものであり、そして、主イエス・キリストに対するものだとヨハネが記しています。なぜ、彼らを礼拝するか？それは「**救いは、**」と書かれている通り、救いが私たちに与えられたのは父なる神がそのことを計画なさり、主イエス・キリストによってそれが完成したからです。ですから、この神によって救いが完成し、この救いを私たちはいただいたと言って、彼らはこの神を誉め称え続け、礼拝し続けているのです。

こうして、ヨハネが記した様子を見るとときに気付くことは、主イエス・キリストがだれであるのかということがはっきりしていることです。父なる神を礼拝するのは当然です。でも、同じように、主イエス・キリストが礼拝されているのを見た時に、主イエス・キリストが神だということを明らかにしています。ヨハネはそのことを人々の前で何度も繰り返して明確にして来ました。イエス・キリストは神です。礼拝をお受けになる唯一の神です。そして、この父が、そして、子なるイエス・キリストが礼拝されている様子がここに記されているのです。天における救われた人々が、神の前で大声で神を称え続けている、この神を礼拝し続けている様子です。

3. 群衆たちとの礼拝 11-12節

そうするとこの礼拝に加わってくる者たちがいます。

1) 群衆に加わる者たち

11節「**御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、**」、神の御座があり、その周りに長老たちがいて、その周りに四つの生き物がいて、その外側に天使たちがいるのです。

(1) **天使たち** : 天使たちがこの礼拝に加わります。「**御使いたちはみな、**」とあります。天使たちのすべてです。彼らには救いはありません。罪を犯すことのなかった聖い天使たちです。この天使たちのすべてがこの賛美に加わって来るのです。数え切ることのできない数、聖書の中には「**幾千、幾万**」

と書かれています。ダニエル書 7：10に「火の流れがこの方の前から流れ出ていた。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。」とあります。また、黙示録 5：11には「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。」と書かれています。大変な数の天使たちがこの賛美に加わって神を称えているのです。ヨハネはその光景を見ているのです。

先にも少し触れましたが、この殉教したクリスチャンたちが神の前で称えていることは「救われたこと」でした。神が救いをくださったことを喜び称えているのです。天使たちがそれに加わって、彼らも神を称えていると言います。でも、天使たちには救いはないのです。神は天使のために救いを備えられたのではなく、私たち人間のために備えてくださったのです。でも、天使たちは彼らと一しょになって救いを喜んでいると言います。救われていないのに…、救いがどんなものか分からないのに…。でも、確かに、それはみことばが教えていることです。

思い出してください。天使が、ひとりの罪人が罪を悔い改めたときに一しょになって喜んでいる姿が記されています。イエスが、百匹の羊を飼っている者がその一匹失ったらどうするかという話をされました。その一匹を探しにいくと…。10枚の金貨をもってその1枚を失ったらどうするか？それを探すと。そして、それらを見つけたときに、自分が喜ぶだけでない、周りの人たちも一しょに喜んでくれと言います。そのときにイエスはこのように言われました。ルカ 15：10「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」、天使たちは確かに救いに与っていません。救いがどんなに素晴らしいものか経験していません。でも、彼らは神のあわれみによって罪人が救われたときに一しょになって喜んでいるのです。ですから、この11節に書かれている光景でも、無数の殉教者たちが神を称えている、救いを喜んでいるときに天使たちも一しょになってその素晴らしい神を称えるのです。いったいどんな光景でしょう？私たちが見たこともないし、我々の想像をはるかに超えた大合唱が天でなされ、すべての者が心一つにしてこの偉大な救い主なる神を誉め称えているというのです。

(2) 長老たち : 天使たちだけでなく、長老たちも加わって来ます。長老たちとは、もう4章で見ましたが、これは「教会の代表」です。空中再臨で天に召された教会時代のクリスチャンたちの代表たちです。彼らもそこに加わって来ます。

(3) 四つの生き物 : これは「特別な天使たち」でした、セラフィムやケルビムなど、彼らもそこに加わるのです。

そして、彼らが神の前でどのようにふるまっているのか？11節の後半に「彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、」とあります。このすべての者たちが「神の前にひれ伏して神を崇拝する」のです。これこそが神に対するふさわしい態度です。

旧約聖書を見るときに、例えば、アブラハムも神の前にひれ伏しています。創世記 17：3に「アブラハムは、ひれ伏した。神は彼に告げて仰せられた。」とあります。モーセたちもそうでした。神のために和解のいけにえをささげた後、主の栄光が民全体に現れたとあります。レビ記 9：24「【主】の前から火が出て来て、祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪とを焼き尽くしたので、民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏した。」と、そのときにモーセたちだけでなく民全体がそれを見て叫んでひれ伏したと書かれています。神の臨在を見た時に、人々は恐れて神の前にひれ伏すのです。メリバでイスラエルの人たちはモーセに愚痴を言いました。「水が飲みたい」と。そのときに、モーセとアロンは会衆の前から去り会見の天幕の入り口に行ってひれ伏したと書かれています。民数記 20：6「モーセとアロンは集会の前から去り、会見の天幕の入り口に行ってひれ伏した。すると【主】の栄光が彼らに現れた。」、エゼキエル書 44：4にも「彼は私を、北の門を通過して神殿の前に連れて行った。私が見ると、なんと、【主】の栄光が【主】の神殿に満ちていた。そこで、私はひれ伏した。」と書かれています。

つまり、皆さん、神を愛し神を恐れた人たちは、神の前に立ったときに彼らは主の前にひれ伏すのです。神であられるからです。絶対者であるからです。私たちの心の態度はどうでしょうか？そのような恐れをもって生きているのかどうか？神が祝した人々、神が大いに用いられた人々、彼らに共通してあった心の態度はそれでしょう。「ひれ伏す」というのは「行為ではなく心」でした。神を深く恐れている、その畏敬の念がこのような行為を生み出していったのです。

2) 礼拝 : 神への賛美

12節に記されていることばを見てください。「言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」、彼らの祈りは「アーメン」に始まり「アーメン」で終わります。まさに、この後見て行く七つの神のご性質とも言えるその一つ一つのことを見るときに、確かに、神は礼拝に値する方である、確かに、称賛に値する方であると、そのことが記されて

います。このような称賛に値する方、それが私たちの神であると言うのです。簡単に、この七つのことを見ていきましょう。

(1) **賛美** : 神を賛美する、なぜなら、神は私たちの創造主だから、私たちを贖なっただけでなく救い主だから、そして、神は私たちを永遠に守ってくださる方だから、ゆえに、私たちはこの方を誉め称えるのです。子どもが自分の親を誇るのと同じことです。私たちが造ってくださった神です、この方は。私たちがその罪から救い出してくださった方です。私たちが当然感謝を払うべきお方です。当然、私たちが誇るべき存在です。こんな偉大な神ですから、賛美に値するお方です。

(2) **栄光** : 栄光ということばには創造主でありさばき主である方に対して、被造物が声に出して畏敬を表わすという、そういう意味があります。「栄光を受けるにふさわしい方です。」と言っても何となくピンと来ませんが、創造主でありさばき主である方に対し私たちの畏敬を表わすこと、それが「神に栄光がありますように」ということです。「神さま、あなただけがすべての被造物から称賛を得るにふさわしい方です。あなたはすべての被造物から恐れられて当然のお方です。」と。私たちは神がどんなお方か、どんなことをなさったかを知っている者です。ゆえに、その方にふさわしい称賛をささげ続けていくのです。神に栄光があるようにと。私たちの畏敬の念を神に対して表わしていくのです。それにふさわしい方だからです。

(3) **知恵** : 神はすべての知恵の源なのです。例えば、私たちが本当に幸せを求めるとするならば、だれに尋ねますか？皆、幸せになりたいと願っている。でも、幸せになるためにだれに質問しますか？その答えを出せるのは神しかないのです。なぜなら、私たち人間は何が幸せなのか分かっていないからです。皆、いろんなことを言っています。神だけが本当の幸せが何かをご存じです。その方のところにいかないで、私たちはどのようにして幸せを見つけられますか？神だけに知恵があると言うのです。だから、私たちはこの方を誉め称えると言います。

(4) **感謝** : 主が与えてくださった救い、日々与えてくださっているその恵み、その一つ一つを見ると、それらすべては私たちが受けるに値しないものばかりです。そのようなものを一方的に与えてくださった神、「あなたは私たちの感謝を受けるにふさわしい方です。私たちの感謝はすべてあなたに向いています。こんなにすばらしい祝福をくださったのですから。」と。I 歴代誌 16 : 34に「【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」とある通りです。

(5) **誉れ** : 「名誉、尊敬」という意味もあります。神は礼拝をお受けになるにふさわしいお方です。決して、私たちと対等ではないのです。パークレーという神学者はこのように言います。「我々は神の前にへり下り、神から何かを受けようと願う代わりに、自分が持っているもの、また、自分自身を神にささげなくてはならない。」と。どこかで私たちは勘違いしているのです。神が私に何かを与えて当然であるかのように思っていないですか？皆さん。神は私たちに必要なものをすべてくださったのです。私たちが間違っているのは、私には未だ欠けているものがあると思っていることです。あなたに永遠のいのちが与えられたのでしょうか？あなたのすべての必要を知っているだけでない、それを与えることのできる神があなたといっしょにいてくださるのでしょうか？そして、これまでもそうだったし、これからもそのように与えていくと言われているのでしょうか？何が必要ですか？すぐに私たちは周りの人と比較して「神さま、もっとこれをください。あれをください。そうしたら私は満足しますから…」と、そのような祈りをしているからいつまで経っても満足しないのです。まだ分かっていないのです。私たちはすべてのものを神からいただいているのです。私たちの信仰生活は「神さま、あれをください、これをください」ではなく、与えられたものに対する感謝の応答です。ですから、この神は礼拝をお受けになるにふさわしい方、この方は私たちが心から誉め称えるに値するお方です。

(6) **力** : 神はご自分のみこころをだれの助けも借りずに行われる方です。すべてのことを神はご自分のみこころに沿って為しておられます。約束されたことを必ず成就するその力が神にあり、

(7) **勢い** : そして、私たちが主のみこころに従って行こうとするときに、そこに神の勢いがある、神の助けがそこに備えられているのです。それによって私たちはみこころに従って行くことができるのです。神の力によって、神の助けによって、神が備えてくださる勢いによって、私たちは神のみこころに従って生きていくことができるのです。

こうして、この救われた者たち、そして、天使たちが神の前で「だから、あなたは称賛に値するお方です。だから、あなたはすべての被造物から礼拝を受けるにふさわしい方だ。」と、まさに、「アーメン」のお方なのです。

この「アーメン」ということばは私たちも祈りの中でよく使います。「本当に、確かに、その通り」という意味です。ですから、ここで言われていることが「その通りです。まさに真実です。このような神です。こんな祝福を私たちに与えてくださったお方です。」と、彼らはそのことを称えているのです。

そして、今、私たち信仰者が思うことは、そのために私たちはこの地上に置かれているということです。天に行ったときにすることを今私たちは地上でするのです。私たちがこうして礼拝をしているのは、何となくこの時間に集まらなければいけないからではなくて、この神が礼拝に値する神だから、神の為にしてくださった一つ一つの恵みを覚え、その方を心から称えるためにこの地上でこの方を誉め称えるのです。そして、天に行ってもこの方を誉め称え続けるのです。そのような礼拝をささげているのかどうかを、私たちはしっかりと自分に問いかけてみる必要があります。

ヨハネは天においてこのような光景を見るのです。救われた者たちが天使たちといっしょになってこの偉大な神を称えている。私たちもそこにジョイントするのです。いっしょになってこの神を誉め称えるのです。でも、それは今この地上にいて私たちがすることです。

B. 神のあわれみ 13-17節

13節から終わりまでを見ると、ここには「神のあわれみ」が記されています。

1. 群衆の正体 13-15a節

ここを見ると、「白い衣を着ている人たち」がいったいだれなのか？と長老のひとりがヨハネに問い掛けています。13節「長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか」と言った。」、この質問を長老のひとりがするのですが、この質問をしたのは、彼が「白い衣を着ている人たちがだれなのか？」を知らなかったのではないのです。彼はそのことを十分知っていました。だから、この後、その説明をしています。では、なぜこんなことをヨハネに質問したのでしょうか？それはこの人たちがいったいだれなのかをヨハネに尋ねることによって、そのことを明確にして、そのことを決して忘れないようにとするのです。例えば、私たちがただ聞いているだけならそれだけですが、質問されるとそのことについて考えるでしょう？この長老のひとりにはヨハネに質問するのです。当然、ヨハネはそのことについて考えたでしょう。そして、14節「そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです」と言った。」、すぐに彼は「私は知りません、教えてください。」とこの長老のひとりに問いかけるのです。長老のひとりには「これから話すことは非常に大切だ」と、ヨハネにしっかりと覚えておくようにと改めて言うのです。「すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」

1) その衣を小羊の血で洗った 14節

彼らは「救われた者たち」だということを明らかにしています。14節にある「主よ」ということばは神に対するものではありません。ヨハネが長老のひとりに呼びかけているのです。

(1) 衣 : これは罪のからだを象徴します。人間の罪のからだを象徴するものです。生まれながらにすべての人は罪によって汚れています。罪の衣を身にしていると、イザヤ64:6a「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。」と書かれています。ゼカリヤ書3:3, 4「ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。:4 御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」、つまり、私たちは罪に汚れているということ、ちょうど、着物が余りにも汚れきっている様子、何の価値もない、ただ、もう捨ててしまうだけ、そういう状態にある、それがまさに我々の罪ある者の姿であると言うのです。

(2) 小羊の血 : その罪のからだを「小羊の血で」と言います。これは「主イエス・キリストの贖いのみわざ」を象徴しています。主イエス・キリストのいのちによって、あの十字架の身代わりの死によって、信じるすべての人の罪を拭い去ってくださいと。ペテロはこのように言います。Iペテロ1:18, 19「:18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、:19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と、主イエス・キリストの贖いによって、罪の赦しをいただいた、救いに与ったということです。

(3) 洗った : 罪からの聖め、救いを象徴した表現です。この長老のひとりが説明したことは、彼らはその罪のからだをイエス・キリストの贖いのみわざによって聖めていただいて、救いに与った人たちだということです。そのことを「白くした」と表現しているのです。永遠の義が与えられた者たちだということです。詩篇51:7「ヒソブをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。」、黙示録22:14「自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通して都に入れるようになる者は、幸いである。」。

2) 大きな患難から抜け出て来た者たち 14節

最初に、「彼らは救われた者たちだ」と長老のひとりには説明しますが、もう少し、説明をしています。

彼らは「大きな患難から抜け出て来た者たちで、」と。繰り返しますが、空中携拳があった後、患難時代が始まりました。その大変な患難時代の中であって、彼らは救いに与り、そして同時に、彼らはいのちを落としたのです。この患難時代は大変な時代です。願わくは、私たちの愛する者たちがその中を通っていかないことを願って止みません。特に、後半の3年半は大変です。そのことは8章から見ていきます。マタイの福音書24：21に「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」とイエスが言われたことが書かれています。人類が経験したことの無い苦難がこの地上に訪れるということです。

3) 聖所で昼も夜も神に仕えている 15 a 節

今見た箇所、7章で「あの白い衣を着た人たちはいったいだれですか？」という問いかけに対して、長老のひとりが答えてくれました。「救われた者たちだ」と。15 a 節「だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。…」、救われているから彼らは神の前において神に仕えていると言うのです。これは天でのことです。神の御座がそこにあるということです。天において今現在神の御座があって、そこで救われた者たちは、そのたましいはこのように神に仕えている、しかも、昼も夜もと言うのです。

主イエス・キリストが地上に帰って来られた後、千年の間、そこには確かにこの地上にも御座があります。そこで人々は主に仕えるのです。ところが、千年王国が終わって神が新天新地をお造りになる、新しい天と地をお造りになるとき、そこにはもう御座は存在しないことを聖書が教えています。また、新天新地が神によって造られた後、そこには昼も夜もないことも教えられています。黙示録21：25「都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。都の門は一日中決して閉じることがない。」、確かに、今、救われた者たちのたましいは天において神に仕えている、そこには御座が存在する、そこに父なる神が着座しておられる。地上に千年王国が誕生したときにも、そこに御座があって、神はその御座に着座されて、人々は神に仕えるのです。でも、その千年が終わった後、新天新地になると、それが一変すると言います。そのような聖所が必要でなくなる、そして、夜もなくなるとみことばは教えています。でも、この時はまだ、そこに御座が存在している様子が記されています。

さて、最初にも話したように、このような質問を長老のひとりがヨハネに質問しました。ヨハネがしっかりと大切なことを覚えるためでした。この長老のひとりにはヨハネに何を教えようとしたのか、ヨハネがしっかりと覚えておくべきことは何でしょう？それは、神というお方はあわれみに満ちあふれたお方であって、患難時代でも救われる人々を起こされるということです。そのことをずっと見て来ました。患難時代においても神は多くの人々を救われるのです。でも、どうぞ患難時代を私たちの愛する者たちが通らないように…。今の恵みの時代に救われなくても患難時代に救われるかもしれないと、私たちはそんなことを希望するかもしれませんが、そのようなことの保証はどこにもありません。今、私たちが生きている間に、しっかりとこの福音を語ることです。確かに、聖書は私たちに、神はあわれみ深い方であって、患難時代においても多くの人たちがこの救いに与ると教えています。なぜなら、患難時代に福音が全世界に及ぶからです。

2. 神の祝福 15 b - 17 節

彼らにはどのような祝福が約束されているのか？見ていきましょう。

1) 主の守り 15 b 節

15 b 節「…そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。」、これは神の守りのことです。ちょうど、幕屋を彼らの上に張るように神はこの人たちを守るという約束を神は与えているのです。地上にいては危険と隣り合わせでした。でも、今、神とともにいて彼らは永遠に神のもとで守られていると言うのです。

2) 主の満たし 16 節

神の満たしの約束があります。16 節「彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。」、イザヤ49：10に「彼らは飢えず、渴かず、熱も太陽も彼らを打たない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、水のわく所に連れて行くからだ。」と同じことが教えられています。神はすばらしい約束を与えてくれています。もう彼らは渴くことがない、満たされると。なぜなら、その理由がその後17 節に書かれているからです。

◎その理由：なぜ、彼らが満たされるのか？

17 節「なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」、

(1) 彼らの牧者となり：イエスが彼らの牧者だからです。良い牧者は羊のために必要なものを備

えられます。詩篇 23 : 1 に「【主】は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。」とある通りです。

(2) いのちの水の泉に導いてくださる : 良い牧者は羊に水が必要だと知っているから、いのちの水の泉に導いてくださる。だから、彼らはいつも満たされていると言います。黙示録にこのように書かれています。21 : 6 「また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」、22 : 17 「御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」。

(3) 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる : 地上にいて彼らは涙が尽きませんでした。悲しいことの連続でした。でも、神の前に立った時にもう彼らは涙することがないのです。すべてから解放されたからです。黙示録 21 : 4 に「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」とあります。イザヤ書 25 : 8 には「永久に死を滅ぼされる。神である主はすべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる。【主】が語られたのだ。」と神の祝福を描写しています。

こうしてヨハネはすばらしい約束を見たのです。神の救いに与った者たちに対する約束です。神が彼らを永遠に守ってくださるし、彼らを満たしてくださるのです。そのような祝福を神が与えてくださると言います。恐らく、この幻を見たときにヨハネは思ったことでしょう。なんてすばらしい神なのか？ 私たち人間をあわれんでくださり、そして、こんな人間に救いをいつも与えてくださると。

皆さん思いませんか？救われている皆さんはこんな疑問を抱きます。なぜ、こんなにすばらしい救いがあるのに人々は信じないのか？神はずっと救いの御手を差し伸べてくださっているのではないですか？人間は逆らい続けているのに、神はそれでもなお救いの御手を差し伸べてくださっています。患難時代です。クリスチャンがいなくなった後も、神のさばきがこの地上に及んでいるときも、神はそれでもまだ人々に救いの御手を差し伸べてくださっているのです。私たちが思うのは、なぜ、人々はみな、全人類はこの救いに与ろうとしないのか？なぜ、こんなすばらしい救いがあるのにそれを受け入れようとしなかったのか？

答えは簡単です。人々は信じたくないのです。だから、信じないのです。それが人間の罪なのです。救いがどんなにすばらしいものであるかと説明を受けても彼らは信じたくないのです。どんなに神が手を差し伸べても彼らは信じたくないから信じないのです。そして、彼らは永遠の滅びを選択しているのです。悲しく愚かなことです。でも、我々は希望を持って、先に見たように、主の力があり、主が私たちに勢いを与えてくださるから、主に従って生きるのです。それだけでなく、私たちが主が望んでおられる福音のみことばを語る時にも神は助けをくださるのです。その助けをいただいて語り続けることです。失望してはならないのです、皆さん。終わりは来るのです、確実に。さばきの日は来るのです。でも、救いがあるのです。その救いに与るようにとしっかりと語り続けていきましょう。それが終わりの時代に生きている私たちに、もちろん、どの時代でもそうですが、神が私たちに望んでおられることです。あなたに望んでおられることです。

この一週間、皆さんがそれぞれの所でしっかりとこの救いのすばらしいメッセージを語り続けていられることを心から願います。

《考えましょう》

1. 9 節の意味を説明してください。
2. 患難時代に救われ、殉教したクリスチャンたちは神の前で何をしているのかを説明してください。
3. 14 節の「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」を説明してください。
4. ひとりの長老はヨハネに質問をしました（13 節）。長老がヨハネに教えたかったことは何だったのでしょうか？